



▲三王の碑



三王堤防の標識▶

背景

昔、吉野川上流の貞光付近の吉野川の流れは、今とはかなり違っていました。貞光辺りでは、吉野川は西崎から二手に分かれ、一方は南を流れ、もう一方は北を流れ、江の脇で合流していましたので、今の貞光のまちの北半分は水の底にありました。このため、雨が降り洪水が発生すると、濁流が沿岸を洗い、住民の被害は甚大だったと言われていいます。この話は、住民のために築堤を始めたものの、工事に関して住民に過重な勞役を課したために訴えられて自害した代官の話です。

アクセス 三王神社

- 美馬橋の南詰からJR貞光駅方向に100m程行き、右手の山への小道を100m程登る
- つるぎ町貞光字西山
- 緯度経度 北緯34度02分28秒、東経134度03分14秒



貞光の代官原喜右衛門は、吉野川の氾濫から住民を救うことを決意し、底幅八間（二間は約一・八メートル）、天幅三間、高さ二間半、長さ二百八十八間の堤防を築造する工事にとりかかりました。明暦年間（一六五五〜一六五七）のことです。

しかし、着手してみると予期せぬ困難が続出しました。難工事のため仕事を捨てて逃げる人夫が多くなりました。また、予定以上に工費がかさみ、その金策もつなくなりました。このため、代官は私財のすべてを投げ出し、しばらく工事は順調に進みましたが、その金も底をついてしまいました。ついには工事の完成をあせって近辺の村々にお触れを出し、連日農民を無償で工事にあたらせました。苦しさに耐えかねた農民はその困苦を藩主に訴え、結局、代官は役所を追われる身となりました。

役所を追われた原喜右衛門は、西崎山の平らな石の上に座して眼下に流れる吉野川に目をやりました。すみきった水、まさに完成に近づいている工事現場も一望の下にあります。無量の感慨をこめて静かに用意した九寸五分（三〇センチメートル弱）の短刀を右手に左の脇腹につき立て一文字に引きました。供をしてきた二人の家来も追腹（家臣が主君の死のあとを追って切腹すること）を切りました。

今日では、三人は堤防建設により貞光の発展を築いた三人の義人として、吉野川を見下ろす三王神社に祀られています。